

あゆみ通信

VOL. 187

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

知恩報徳



真宗門徒にとつて「報恩講が大切」と言われるのは何故だと思いませんか。

「報恩講」とは宗祖親鸞聖人の「み教え」に会い、聖人の御恩を感じて生活する人々が、年に一度その御恩に報いずにはおれない気持ちをもって集う報恩の集いです。(中略)

親鸞聖人の教えによって「生まれた意義と喜び」を見出し、この人生が空しく過ぎない真の喜びを知らされ、日々の生活に本当の意味での張り合いを生きる人々にとって、勤めずにはおれない報謝の集いを持つことは当然でありましょう。言い換えれば、この人生に「報恩」の生活を見出し、報恩の生涯を尽くして生きる身となった人を真宗門徒と言うのであります。

親鸞聖人のご命日を縁として、あらためて教えを聞かせていただき、今生きていることの尊さを明かにする。このことが親鸞聖人の御本意に^{かな}応うことであり、同時に私自身の本当の喜びでもあります。

日頃忙しく駆けずり回っている私たちです。平常お寺にご無沙汰の人も、せめて年に一度の報恩講には親鸞聖人と真向かいになって「何のために生きるのか」自身の生き様を問いつつ、じっくりと聖人の耳を傾け、悔いなき人生を見出していききたいものです。そして、子や孫や友人たちにまで、大切な真実教(真宗)を伝えていこうではありませんか。(本多恵く「教化センター通信」64より)

第2組報恩講

日時 11月21日(木) 16:00

会場 即應寺

内容 お勤めと法話、同朋総会と懇親会。

会費 2000円(お斎代)

※門徒会年会費受け付けます。

如是我聞 9/6第2組同朋法会

廣瀬先生法話聞書

佛足寺 細川 克彦



先生は今回、「已能御無明闇」から「即横超截五惡趣」のところで話されました。

「すでに無明の闇は破られているといっても」は、その前の「撰取の心光、常に照護したまう」を受けており、光に遇うとは教えに遇うということであると。

そして無量寿の教えを私たちの煩惱(地獄・餓鬼・畜生・天上・人間)が覆っていて見えないけれども、暗闇ではないと。その明るさは教えに出遇っていることである。また信を獲るとは私たちに五惡趣(地獄、餓鬼、畜生、天上、人間)を経廻っていると知ることであると。

また、「獲信見敬大慶喜」のところでは、「獲信見敬」とはお内仏の前で「正信偈」をお勤めし、普段から阿弥陀仏にお会いし、敬い慶ぶ生活を言っているのではないかと。休憩後は、「見えないところに大事なものがある」と言うことについて、いろいろ具体的な例をあげて話されました。

阪神淡路大震災が起って先生がボランティアをされていた時、先輩から、ボランティア出来るのも奥さんの表に現れない支えがあつ

親鸞のことば

浄土への道を歩む

他力というは 如来の本願力なり

教行信証

「他力」とは他人のふんどしではなく、「如来の本願力」、阿弥陀さまの本願の力を指します。私個人の欲望から最も離れた、すべてのものを救うまでは自分は仏にならないと言う誓いが阿弥陀さまの本願です。

私たちは如来の本願力に支えられて、浄土へと道を歩むことが願われています。それは日々の生活の中で、自分たちがいかに「私の願い」を優先させているかを教え続けられる歩みです。

。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

仏法不思議

父母のご縁で、即應寺に通うようになってから、20年が過ぎ、自身も今月で84歳になります。人生振り返れば、戦争直前に阿倍野区阪南町の長屋で生まれて、防空壕避難の生活、少年期はシラミ対策でDDTを。脱脂粉乳とコッペパンの給食。そしてお決まりの学生生活。「宗教はアヘン」とマルクスを信じ、就職をして、ヒューマニズムで、人権問題を仕事に右往左往。毎日が無我夢中で、紆余曲折と七転八倒の毎日でした。

そんな自分が、父母の死をきっかけに、藤井善隆住職(当時)による親鸞聖人の教えに出会い、即應寺のご門徒さんや、あゆみの会のお仲間や、第2組門徒会の多くのお仲間とご縁が出来ました。いつの間にか、毎朝、お内仏の前に座り、お勤めをしている自分がいます。

今、やっと阿弥陀さまの本願力で生かされている自分の人生をまるごと、ただただありがたくいただいて、{おかげさまでした}とお念仏の生活を続けていきたいと思ひます。(本)

てこそ出来るのではないかと教えられたこと。

また、東井先生のご本で「^{こうがいすい}口蓋垂」(ノドチンコ)のことを書かれているお話を紹介され、見えないところで働いている「いのちのお陰様」について話されました。

また、どこかで聞かれた話として、ある人が3年前に父親を亡くされ、小さな金庫が出て来た時、兄弟が見守る中、金庫を開けたところ、子どもの頃の100点満点の答案、表彰状、初めての給料で買ってあげたネクタイが出てきた。父の怖かった顔の背後にある愛情に気付かされ、泣いた話などを聞かせていただきました。これらは、陰に隠れているけれど量らない世界、阿弥陀さまの世界ではないかと、話されました。

門徒会&あゆみの会 合同研修会が開催

2024年9月17日(火) 午後1



時30分から、天王寺区の宗恩寺(池田英二郎住職)をお借りして、第2組門徒会員研修大会とあゆみの会第3回例会合同の研修会が、組内の門徒会員及び会員15名が参加しして開催されました。

真宗宗歌で開会、挨拶を第2組墨林浩組長、門徒会中嶋ひろみ会長からありました。

今回、「本願寺相伝」について、池田英二郎先生(第2組副組長・宗恩寺住職)からお聞きしました。

先生は、最初に、真宗大谷派が伝えているものは何か?それは「信心」であり、「^{あんじん}安心」であると。また、「相伝」とは何かについて、『歎異抄』『恵信尼消息』、『浄土文類聚鈔』(文類偈)を引きながら話されました。

そして『相伝』は本願寺八



代蓮如上人が「相伝のシステムを確立されたこと。その著作『御文』に「祖師聖人御相伝一流の肝要は、ただこの信心ひとつにかぎれり」(2帖目3通)とされ、本願寺住持の一子相伝では断絶の心配があるので、法脈を分流された。それは、本願寺を継職した長男の順如が早逝されたことがきっかけとも言われる。

また、「聖教の言葉を一字一句理解し明らめるのではない。肝要を理解する。平生から耳にする知れたる義、覚えたことを心底に徹するまで幾度も聴聞する」(『略本私考』「叢書」2巻)

最期に『相伝』は真宗大谷派の儀式・荘厳に表されていると。

終わりに、閉会挨拶を細川克彦あゆみの会会長から、恩徳讃を全員で斉唱して閉会しました。

如是我聞

池田英二郎先生法話要旨

佛足寺 細川 克彦

本願寺「相伝」に学ぶ

「相伝」と言う言葉は聞いて

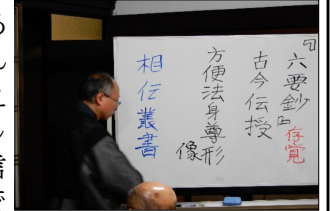


いるが、内容がよく分からないのでお話を聞きたいという要望に応じて、先生は「本願寺相伝に学ぶという講題でお話してくださいました。

本願寺は元は親鸞聖人のお墓であつたが、親鸞聖人の教えが孫の如信上人に伝えられ、また覚如上人に伝えられた。その教えを世に伝えていくた

めに、阿弥陀仏を本尊とする本願寺というお寺にされた。」「相伝」は本堂の荘厳や儀式、そして教学として伝えられてきた。

「相伝」の教えは、最も大切なこととして信心(安心)を得ることである。それも、教えを理解してから信ずるので



はなくて(存知)、教えを繰り返し聞いて、阿弥陀如来の心が私に届くと言う信心の眼によって知らしめられる(信知)、それを「往生の信心」と。そこを『歎異抄』第2章で「相伝」の心をよく表している。

「解して信じるのでなく、信じて解する」(『浄土真宗依典籍私考』意)と言うことが「相伝」の大切な教えである。

蓮如上人は「相伝」の教えを大事にされ、本願寺のほかには五つのお寺を相伝家として「相伝」の教えが途絶えないようにされた。

また、念仏を口で称えることを強調したり、自然と念仏が口に出るように聞法していきましょうと、また、仏恩報謝の念仏と言われるが、「相伝」の教えではあくまでも「南無と言うのは帰命、また発願回向の義なり」と言われるように、阿弥陀さまの「帰命してください」と言う呼びかけとして、お念仏を聞いていくことであると。むしろ、信心をいただくことが御恩報謝の意味を持つと話されました。

また、「相伝」は『教行信証』の読み方を教えるのみで、そのまま受け取ることを教えている。そして、阿弥陀のお心を伝えるのが「相伝」の説教であると。

「相伝」の教えから清澤満之先生も出られ、曾我量深先生も出られたと、熱く語られました。